

皮膚科領域における和漢薬と西洋医薬の使い分け —柴苓湯のステロイド副作用軽減効果を中心に—

徳島大学前学長

武田克之

皮膚疾患患者の1/3以上を占める湿疹群も初期なれば漢方薬が第一選択となり、再発を繰り返し慢性に経過する難治症例の治療に対しても体質改善を含めて漢方治療を薦めうる。また、湿疹群に頻用されるステロイド外用剤の減量・離脱を図り、抗ヒスタミン剤にみられる眠気などを欠く併用薬剤として漢方薬が賞用されている。漢方薬とて副作用がないわけではなく、急激に効くものはそれなりの副作用をみる。しかし、漢方では急激に効いても副作用が目立つものは下薬として嫌われる。逆に遅効性でも副作用の稀な漢方薬は上薬として重用され、漢方療法の特徴を物語っている。最近、各種の新しい免疫薬理的手法で漢方薬の生体系に及ぼす作用を免疫系の調節の面から検討した報告も散見する。本講演では、私らの研究に触れ、皮膚科領域の漢方治療に言及する。

Glucocorticosteroid外用剤（以下GS剤と略記）と漢方薬の併用療法の有用性：最近GS剤の対象となる慢性疾患の一部に漢方方剤が試みられている。GS剤長期連用症例のGS離脱に奏功し、さらに小柴胡湯によるGS作用の増強効果および長期投与モデルにおけるGS剤の副作用の軽減効果は、GS剤の抗炎症効果を抑制しうる可能性が示唆されている。そこで、7週令のウイスター系雄ラットにFluocinolone acetonide外用剤（以下FAと略記）0.2gを33日間背部に塗擦し、柴苓湯を1日1回経口投与した。さらにFAを0.05gに減量し、軽度の副作用を中心に検討した結果、体重はFAにより著しく減少したが、柴苓湯を併用すると体重の減少が有意に抑制された。またFA単独群では3匹死亡したが、柴苓湯併用群では0.5g/kg群で1匹死亡したのみで、柴苓湯の併用で死亡が制御された。さらに、FAによる白血球減少は柴苓湯の併用で抑制し得なかったが、百分比をみるとリンパ球の減少が柴苓湯の併用で有意に抑制された。他方、FAにより標的臓器の重量は減少したが、柴苓湯の併用により副腎重量の減少が有意に抑制され、また、脾臓の萎縮と胃の出血も抑制された。なお、GS剤と漢方処方同時投与において吸収阻害の有無を確認する目的で血中濃度を測定したが、併用投与における吸収阻害はなかった。

21世紀を目前に控え、和漢薬と西洋医薬が相補して日常診療に大きな役割を果たす日は近い。